The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	隠喩における指示
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 1984, 5, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八四年二月〕
『年報人間科学』第五号　一頁―二三頁

隠喩における指示

菅野盾樹

隠喩における指示

一　隠喩において指示の転移が観察されるだろうか

隠喩は言語の働きの可能性の一つである。そこで、隠喩からさかさに言語を覗きこんだら、そこにどのような光景が眺められるだろうか。今度は、言語の可能性が隠喩のなかに小さな火種のように点っているのではないか。われわれはここで、隠喩を己れの可能性として保つために、言語は本来どのようにあるべきか、とあらためて訊ねようというのである。これまで隠喩についてさまざまな問を投げかけながら、その考究を通じて隠喩の具体相をこの手に摑もうと努めてきた。問は隠喩の必然性、真理、意味、同一性の基準、解釈の機制などにわたっていた。こうした問題区分に、隠喩に宿された言語の本来性を明らかにする目的で、今一つをつけ加えよう。すなわち、それは隠喩における指示の問題にほかならない。

なんによらず哲学の問題を問うとなると、紀元前四世紀のギリシャ哲学者の著作中に手掛りや示唆、場合によっては解答を求めることがしばしばおこなわれている。この風にならって、アリストテレスが〈比喩〉(μεταφορά)に与えた定義を取りあげてみよう。彼によれば比喩とは「異質の名詞が類から種へ、あるいは種から類へ、あるいは種から種へ、あるいは類比によって移行すること」である[1]。この定義には、類種概念あるいは事物を分類する名辞の比喩における役割、同じく類似の役割が示唆されていて興味深いが、今とりわけ注目したいのは、比喩においては名詞が指すものの〈移行〉(ἐπιφορά)が生じる、という指摘である。後世の修辞学者もさまざまな言い方でやはり同様の指摘をおこなっている。この点をもっともあからさまに比喩の定義に盛りこんだのは、特異な外延主義者グッドマンではないだろうか。その定義によれば、「比喩においては、習慣によって確立されたある外延を伴う名辞が、その習慣の影響のもとに他の所へ適用される」[2]のである。よく知られているように、〈比喩〉の語原は meta(なになにを越えて)プラス phrein(運ぶ)ということにある。二つの定義は、こうした語原にうかがわれる比喩の意味を、二人の哲学者の特有な哲学を背景に洗練した所産だと見ることができるだろう。

ありきたりの隠喩の例を眺めてみれば、二つの定義がおのおのの流儀で述べている〈指示の転移〉ということがらは、ただちに明らかなように思われる。たとえば「人間は狼だ」はどうだろうか。ア

リストテレスの言い方をまねれば、この例では種から種へ移行がなされているのだ。つまり動物種の一つである狼から別の動物種の人間へと、名詞の指示するものが動かされている。グッドマンのように「外延」ということば使いをするなら、狼のよせ集めを外延とする「狼」なる名辞が人間のよせ集めまで移される、ということになる。ところでもう少し詳しく考察してみると、隠喩における指示の転移は、そう単純なことでもただちに明晰なことでもない、とわかるだろう。そこで、以下で指示の転移の三つの形式（拡張、縮少、切り変え）を例にあたってあらためて念入に確認してみたい。それに加え、例の二回真の隠喩を指示の転移の観点から調べることにする。

(1)　奴はゴリラだ。

(2)　愛は共同で作る芸術作品だ。

文(1)の主語はアウル・ネルソンという、実在した凶悪な大量殺人犯を指している。もしも述語「ゴリラだ」が文字通りの外延、つまり個々のゴリラの集合を指示するのだとすれば、ここには明らかに指示されたもの同士の包摂関係に異常が生じたことになる。人間は決してゴリラではないからだ。このように、(1)の意味論的異例さは、(1)を解釈しようとする者がまっさきに確認すべきことがらである。そこで解釈者は(1)の異例さを除きそれにまっとうな意味を回復するために、述語の外延をもとのそれとは別の場所へ移すのである。

しかしここで疑問が呈せられるかもしれない。(1)を解釈する者は述語にかんして指示の転移をおこなったが、これはなぜなのだろうか、別のやり方ではいけないのだろうか、(1)の例で言えば、述語「ゴリラだ」にかんしてではなく主語「奴」にかんして指示の転移を施してはいけないのだろうか。

この問を解く鍵は、解釈過程における焦点化の位相にある。聞き手が(1)を解釈するさい、この文を構成する語のうちで「ゴリラ」が焦点化され、他の語は枠としていわば焦点の外へ置かれるのだ。焦点化の機制を今一般的な形で明らかにすることはできない。しかし例(1)について多少の分析を行っておきたい。逮捕された凶悪犯を警察へ移送する車を見に集った公衆の一人が、(1)を語ったと仮定しよう。彼は他人と比べて遜色のない言語能力の持主である。換言すれば、彼は三人称単数代名詞「奴」の正しい用い方を知っているし、また「ゴリラ」の意味や使用法を知ってもいる。「奴」がアウル・ネルソンを指示する事実は、(1)が発言される文脈から規定されるのである。こうした文脈による規定性を精確に述べるのは、それほど簡単なことではない。ここでは二つばかり気づかれた点を述べるにとどめよう。まず第一に、(1)が発言された現場に居合わせた人びとの間で、文脈に即した話の題目（トピック）が何であるかが、暗黙裡に理解されているのでなければならない。警察の車に押し寄せた人びとにとり、関心の的はあの残忍な犯罪者であって、車の型式や刑事ではない。(1)において「奴」がニューヨーク動物園で飼われている類人猿を指すのに使われている可能性は、ゼロだと断言できないが、ゼロにひ

としいと見積ることはできる。第二に、こうした暗黙裡の共通理解を背景にして、指示語の使用を規定する言語戦略というものが作用するということ。「奴」、「これ」、「その時」などの指示語の意味（指すもの）は、文法によって決めることはできない。これに反して「ゴリラ」の語は、この語とゴリラの事実上の関係から離れて、ゴリラを意味する。換言すれば語「ゴリラ」は文法的にゴリラを意味するのである。しかし語「奴」と犯人との間には事実上の関係がある。もしこの語が(1)の発語の状況とは全然別の状況で使われたなら、それはまた別の事物と事実上の関係に置かれることになるだろう。指示語の解釈を規定するのはたんなる文法ではなく、〈戦略〉なのである。「奴」の場合、その解釈の戦略は大雑把に言って、次のようなものであろう。「「奴」という語が生じたら、その可能的指示項のうちからそれが発語された場所により近い候補を指すものとうけとれ。」

「奴」は文字通りに指示している、と見なされる。これに対し、「ゴリラだ」は、目の前にしているのが人間であってゴリラなどどこにもいない以上、有意性に欠けている。かくして、焦点化は述語に施され、主語の方は手をつけられないで残されるのである。今後例を観察するのにあたり焦点化の機制が十分明らかにされたという仮定のもとに話をすすめる。実際は、焦点化には多くの未知の問題が伴うのであるが。

(1)について観察された指示の転移は、アリストテレスの分類に従えば「種から種への」移行であり、また、「ゴリラ」という種の名が人間へ適用されたという意味では、指示の拡張である。それでは次に(2)を見てみよう。

(2)でもやはり指示の転移が生じている。しかし今度の場合(1)とは当事者の身分が異る。(2)の主語ならびに述語は普通名詞（論理学でいう普遍定項）であって、個体を指すかわりに、個体の集合を外延として指示するのである。(2)は意味論的に異例である。というのも、愛は画廊で展示されるものではありえないからだ。そこで述語が焦点化される。述語は並の、個別の芸術作品にかんして真であったものが、今や、並外れた「愛」という名の芸術作品にもあてはめられることになったのである。この例に観察される指示の転移は、アリストテレスの分類で言うとやはり種から種への移行とみなしうるだろう。というのも、愛も芸術作品も、ある意味で人間の創造物（類）に属する二つの種だからである。

さて指示の転移が次の例でも生じているのは、直観的には十分明らかである。

(3)　やぁ、我が社のアラン・ドロン。

しかしここにはまた新たな問題がひそんでいる。何かにつけ女性職員に厚遇される同僚をひやかして、(3)のように当人を呼んだとしよう。ありきたりの文脈では、「アラン・ドロン」は特定のフランス人俳優を指す固有名詞（論理学で言う個体定項）として使われるが、しかし(3)では、それはもうそうした機能を失っている。というのも、

同僚は日本人だし映画に主演したこともないからだ。とするとこの語は本来の指示項から別のそれへ移動されているように思われる。しかし(3)が精確になにを語っているのかは、必ずしも直接明らかではない。問題の核心は、固有名詞の本性にかかわる。この点をめぐり従来から論争は絶えなかったし、今もって決着はつけられてはいない。固有名詞をめぐる係争点とは、果してそれが外延のみならず何らかの内包を有するかいなかである。古くはミルや最近ではクリプキはそれを否定している[3]。この見方に対し、固有名詞がたんに外延のみならず内包をも持つとする説もある。それには大別して三つの種類があるが[4]、今ここで逐一それらを調べる必要はみとめられない。そのうち一つの説だけをひきあいにだして、(3)の解釈がどうなるか、それを見ることにしよう。

その説によると、固有名詞はその外延（指示項）と並んで、それと外延を等しくする確定記述を内包として持つ、と言う。この説に従えば(3)はたとえば次の言い替えを許すことになる。

(4)　君は、我が社の、ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画作品『山猫』でタンクレディを演じた俳優だ。

固有名詞の理論としてこの説が正しいかどうか、今は問わない。そのような問題意識からすると、固有名詞の言い替えと目された確定記述のなかに別の固有名詞が登場しているので、これでは理論として循環するのではないか、という疑いも生じる。しかし今問題なのは、(4)が隠喩としての解釈をうけとりうるのかどうか、そしてそこに指示の転移が見られるかどうか、である。この二つの問にはいずれも肯定の答を与えることができる。ただ指示の転移のタイプは、(1)や(2)の例の場合と異なるものではない。

「アラン・ドロン」が内包を伴う固有名詞であるという仮説と両立するが、しかし今までの例とはちがう指示の転移を理解させる言い替えとして次を挙げたい。

(5)　君がうらやましいよ、アラン・ドロン。
(I envy you, Alain Dolon.)

(5)は(3)の言い替えとして、(3)の発語の文脈（ここには話し手の信念、心理状態も含まれる）によく適合しているように思われる。「君」と「アラン・ドロン」とは文法的機能の点で同格である。それゆえ「アラン・ドロン」は(5)で目的語として出現しているのである。それに、この固有名詞に内包が伴うことを考えることも許される。「アラン・ドロン」はいわば「色男」の代名詞なのだ。(5)は場合により称讃、侮蔑、揶揄などを遂行する原初的実演発語とみなすことができる。焦点化は今度は述語ではなく、目的語（あるいは関係の項の名）に施される。それは本来フランスの俳優を指示項としていたのに、今や目の前の同僚へそれを切り換えているのである。この種の指示の転移は、アリストテレスの区分には現われていないことに注意しなければならない。

以上に、焦点化が施されるのが一般名辞であろうと個別名辞であろうと、指示の転移の生じうる隠喩の例を確かめた。ただし隠喩によっては、枠／焦点の区別が表現形態のなかに与えられていない例がある。「一石二鳥」、「馬の耳に念仏」といった諺の場合がそうであるし、詩にもこの種の例は多い。たとえば

とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

（凡河内躬恒）

では、「花」が女性の隠喩であるばかりでなく、歌全体がある事態の隠喩的表現となっている。花は枝に留められるものではない、そのように彼女たちを引きとどめられはしない。それなのに、花のように去りゆく美しい女たちに、連れ添いたいとは、何とはかない私の情（こころ）であることか。これが歌のおおまかな意味である。この意味を解釈しうる者は、「女は散る花だ」という隠喩をはじめ他の諸々の隠喩を文脈から理解できなければならない。すでに述べたように(5)、枠／焦点の区別は構文論的、意味論的に表現自体に具わるわけではなく、文脈によって構造化される区別にほかならないのである。したがって、区別の実質をそなえぬ隠喩の例をあげて、そこに指示の転移が観察されないと言うのは、隠喩における指示の転移の反例にはなりえない。というのもこの歌には、少くとも「女は散る花だ」という隠喩が前提されているのであり、この前提には指示の転移が認められるからである。

問題をかもすのは「二回真の」隠喩の場合である。これまで調べた例はすべて文字通りに解せば真ではない文であったから、指示の転移がそこで生じていると見なす理由があった。というのも、もしそうでなければ、それぞれが隠喩として意味をなさないだろうからである。しかし二回真の隠喩は、文字通りの意味でも真なのだから、わざわざ指示に変更を加える必要はないように思われる。二回真の隠喩という部類を誤りなく確定することにも問題がある。贋物の例を考察しても、そこから正しい答が得られないのは明らかだ。たとえば次の例を見よう。

(6)　あの殺人犯は残忍な動物だ。

この文は字義的に真である。殺人犯は鉱物でも植物でもなく、生物学的観点からしてたしかに動物に属している。しかし(6)の話し手は傍点の箇所を吐き捨てるような口調で語っているのだ。つまり(6)はそうした言語の肉体の不透明を駆使した表現なのであって、そのおおよその意味は、犯人が人の道に反したケダモノにすぎない、ということにある。聞き手の注意は傍点の部分へ向けられる。しかし今度は、指示の転移の始まる場所を単純に指定することができない。(1)では「ゴリラ」が焦点化され、そこから外延の移動が生じたし、(2)や(3)でも焦点化された文構成要素が転移の始まる場所であった。もしもそのような意味で(6)における焦点が「動物」であるなら、指示は動物の集合という外延からどこへ移されるのだろうか。人間は

動物の一種であるから、はじめから述語の外延に含まれている。だから、(1)でのように、「ゴリラ」の外延があたかもそこへ人間が含まれるかのように拡張されるケースには(6)はあてはまらない。かといって、(3)におけるように、指示されるものの切り変えが(6)に生じている余地も全然ないのである。

(6)は二回真でなく「一回真の」隠喩にほかならないと思われる。要するに「動物」は二義的なのである。一つの意味で、それは山野に生棲するある種の動物を言う。大和言葉ではそれを「毛物」とか「けだもの」と呼ぶ。別の意味で、それは生物学上の動物を言い、当然それには直立二足歩行するわれわれも含まれる。前者を「動物$_1$」、後者を「動物$_2$」と呼ぼう。(6)は「あの殺人犯は残忍な動物$_1$だ」とあらわすべきなのだ。述語に加えられた発音上の強調がその部分の焦点化に一役買う。聞き手は、そのようにして、人間がまるで山野の毛物のように餌食を屠る世界を想像裡に想い描くのである。(6)は犯人を人外へ追いやる宣告の実演とも、非難とも解されるだろう。この解釈には別に傍証がある。人間／動物$_1$という概念のこの二項対立は、われわれの共有知識の、それも無意識の古層に属している。この知識の断片が隠喩の作成に利用されることは、大いにありうることなのである。

しかし次の二例は掛け値のない二回真の隠喩であろう。というのも(6)に認められたような、焦点化される語の二義性をそれらの例に認めることはできないからである。

(7) I have climed to the top of the greasy pole.
（かつて脂だらけの柱の頂上まで登ったことがありましたっけ。）

(8) 高槻の茅屋にて、著者識。

(7)にかんして「脂だらけの柱の頂上に登ったことのある者」が二義的であるなどと、言いはる者はいないだろう(6)。(8)はよく著書のあとがきに見出される著者の発語の一部である。著者は粗末な家に暮している己れの境遇を譬えで述べているのだが、事実、当人が茅葺き屋根の小さな田舎家に住んでいると仮定しよう。この場合、(8)は文字通りに真でもある。しかし「茅屋に住む者」が、「動物」に二義があるというのと同じ意味で二義的であると言うことはできない。文字通り茅葺きの家屋に住む、風流好みの富豪がいないものではない。われわれは断定する。二つの例は本物の二回真の隠喩であろう。ここで指示について観察をしやすくするために(8)を書きあらためる。そして今後はわれわれの考察をもっぱら(8)へ向けよう。というのも、(7)と(8)とに本質的違いは何もないように思われるからである。

(9) 著者は茅屋に住む者である。

茅屋に住む者を全員集めてできる集合（これをAと呼ぼう）は、今しがた指摘したように、その成員の全部が全部、貧乏人とはかぎらない。なかには少数ながら金持ちもいれば中等の資産家もいるだ

ろう。この点で、字義通りに解するかぎり、Aを構成する基準は資産のあるなしとはまったく無関係である。「茅屋」という表現は、しかし、口語体の文や日常会話には滅多に出現しない語句だろう。これを「茅葺きの家」と平易に書き直したものの方が、日常耳にする機会が元の表現より多いかもしれない。いずれの表現にせよ、注目すべき特質がある。「茅屋」は古風であるからこそ人の注意を惹く。一方「茅揖きの家」は、それの代表するものが当節その数を減らし珍しい存在であるという事情によって、やはり耳をそばだてる語句である。前者は文体にかかわる知識（これは言語にかかわる知識ではあっても、百科全書的知識に属する）、後者は家屋の様式にかんする知識（もちろんこれは百科全書的知識の一片であって、言語知識ではない）との相関で、それぞれ焦点化への傾斜をそなえている。

こうした理由で、Aが成員の財産へ無関心な集合であるにもかかわらず、(9)の解釈者は記憶を探って次の事実を想起するだろう。Aの成員がしばしば貧しい、という事実である。一つ注意しておかねばならない。「茅屋」という隠喩に初めて出会った人間でも、その文字通りの意味さえわきまえていれば、(9)を隠喩として解釈することは十分可能なのだ。この表現が前述の分類だとI類（死んでいて、かつ明示的な隠喩）に該当する事実は、今問題にはならない。換言すれば、隠喩をその本質において捉えようとするとき、われわれはそれをあたかも〈実演する隠喩〉であるかのように、つねに取扱わねばならないのである。もしいささか学のある聞き手ならば、その昔国語の授業で万葉歌人山上憶良の貧窮問答歌を習ったさい、貧しい人びとが身を寄せあって住んでいた家が「伏盧の曲盧」（低いかしいだ小屋）だという解説を聞いたことを、憶いだすかもしれない。またかれは同じようにして茅揖きの粗末な小屋の描写を含む物語なり映画なりのイメージ、あるいは実地に見た貧しい田舎家のイメージなどを思い浮べるかもしれない。かれは、こうして、「茅屋」が喚起するものをイコンにして、集合Aの上で指示の転移をおこない、Aの部分集合A′へ至るのである。今生じているのは、縮少という指示の転移にほかならない。以上の記述に必要な変更を加えれば、同様の仕方で(7)における縮少を明らかにできるだろう。

指示の転移という考え方に疑念を抱いたコーヘンは、隠喩によってわれわれが運ばれる場所はしばしば不明確であり、よしそうした外延があるとしても、それを古い外延と区別するのは不可能な場合があるとして、次を指示の転移への反例として掲げている[7]。

(10) All animals are animals.

（動物はみなやはり動物でしかない。）

これは、動物の動物臭さ——その貪欲（がつがつ餌をとる豚を見よ）、その残忍（例をあげる必要があるとは思えない）など、総じて動物のいかにも動物らしいところに食傷した植物愛好家（いや、そもそも生物にうんざりしている鉱物讃美者だったらなおさらぴったりだが）の、動物園をつぶさに見てまわったとき漏らした感慨にほ

かならない。この種の隠喩も二回真であって、少し注意して捜してみれば、類例が少くないことがわかる。たとえば

(11) どんなに気丈だといえ、女は女さ。

(12) 人間はやはり人間だ。

などがすぐ見出される。なるほど、単純にその形態を見るかぎり、これらの例において指示の転移が生じているか、疑わしい。この種の隠喩を〈同一律式隠喩〉と呼ぶことにする。というのも、それぞれはあたかも、動物＝動物、女＝女、人間＝人間を主張しているかのように聞えるからである。例(1)のように指示の拡張も、(3)におけるように指示の切り変えも、また(9)においてのように指示の縮少も、この種の隠喩には認められぬように思われる。

同一律式隠喩を分析する一方法は、語の両義性にたよるやり方である。これに従うと(10)は次のように言い替えることができる。

(13) All animals$_1$ are animals$_2$.

(動物はしょせんけだものさ)。

もしこれが正しいなら、ここに働いている指示の転移は拡張である。とはいえ例(1)における拡張とは様相を異にしている。(1)の場合は、種であるゴリラが別の種の人間へ拡張されているのであるが、(13)においては、動物の一種が動物という類へ拡張されているという違いがある。となると、(13)を〈同一律式隠喩〉と呼んだのは間違いだったことになる。というのも、animal$_1$ と animal$_2$ とは同音異義語にすぎず、(13)が同一律の実質をそなえぬことは、

(14) The mine is mine.

(その鉱山は私の所有だ。)

が同一律に則った文ではないのと同じことだからである。

ただ残された問題、しかも致命的問題は、同一律式隠喩をすべてこのようなやり方で解釈しうるかどうかである。言い換えれば、焦点化される語とそうされぬ語の二義性が、つねに確立している保証があるかどうかである。しかしそうした見込みは立ちそうにない。というのもこの種の隠喩は随意に作成できるからである。「人生は人生だ」、「親は親だ」、「教師は教師である」、「子供は子供だな」、「餅屋は餅屋」、「明日は明日、今日は今日」(最後の二つは諺である)など。こうしていくつか例を並べて気づかれる点がある。これらの例で述語に立つ名は、助詞の「は」によってとりたてて題目として差しだされた主語のいわば代名詞なのである。それは、「弘法大師」が高僧の、「田中角栄」がある種のタイプの政治家の代名詞であるという意味で、主語を映しだす鏡であり、イコンなのだ。

たとえば「子供は子供だな」と人が言うとき、述語の「子供」は子供の、従って己れ自身のイコンにほかならない。「子供」と聞いて、まっさきに喚起される子供の姿態や性状がある。それは子供ら

しい姿態であり、子供らしい性状である。それらはいわば紋切口上で語られた子供性あるいは子供の紋切型(7)なのである。このイコンによりわれわれが運ばれてゆく先は、なんのことはない、同じ子供である。それゆえ同一律式隠喩にかかわる想像力の力動は、(9)の場合と平行している。茅葺きの家の住人がつねに貧しいわけではないが、しかし、それは貧しい境涯の代名詞なのだ。これと同じで、全部の子供が必ずしも子供らしいわけではなく、中には大人びたのもいれば、可愛げのないませたのもいて、さまざまである。にもかかわらず、聞き手は子供らしい子供にイコンを目撃し、全部の子供が子供らしい子供に縮約されるのである。結局、同一律式隠喩における指示の転移は、縮少という型のものなのである。

話し手が「子供は子供だな」と語るとき、かれの念頭には具体的に子供である誰かSが置かれているにちがいない。聞き手にも、その発言が誰にかんして述べられているのか、文脈から推定できる場合があるだろう。話し手によって飲みこまれた部分を表立たせ、なお限量にも留意してその発言を書き直せば次のようになる。

(15)　個人Sは子供であり、かつ、全ての子供は子供である。

「全ての子供は子供である」の部分が最終的にどう分析されるにせよ、(15)の言わんとしているのは、子供であるSをつかまえて「Sは子供だ」と語るのにひとしい。こうして、繰り返すことになるが、同一律式隠喩は、指示の転移にかんし縮少をおこなうと見ることができる(8)。

二　指示の転移の可能性の制約はなにか

これでわれわれは、多くの哲学者が示唆している、隠喩における指示の転移という現象を実地に確認することができた。ただ忘れてはならないことは、この現象はこれと平行する隠喩における意味の変化の現象と同じように、もし隠喩の生成＝解釈過程とのかかわり抜きで語ったならば、不条理でしかない、という点である。ある表現の字義的意味に加えてその隠喩的意味なるものが存在するわけではない。「人間は狼だ」という隠喩が解釈され、十全な世界構成がなされたあかつきには、その表現の意味はつねに字義的でしかありえない。それが隠喩的意味を持つ、と言いうる者は、新たに創造された世界と旧世界の双方に住むことのできた者にかぎられる。かれは両世界を自在に往還して、旧世界から携帯していった辞書を新世界でひもといてみるだろう。そしてかれは今住人でいる世界で使われる「狼」の語がこの辞書の記載事項に合致しないことを見出す。しかし今いる世界で発刊されている辞書の項目に、「狼」の語は合致するのである。ところがこの辞書を旧い世界に持ち返って、そこで使われている語の意味を調べようとしたら、かれはこの辞書が杜撰でものの役に立たぬのを発見するにちがいない。指示の転移についても事情は同じである。語「狼」の指示するものはある世界との連関においてつねに一定である。それが変化した、と言うのは、世

界が改変されたのであり、多世界を往還しうる者が、音声学的に同一の語「狼」の指示を比較してことあげしているにすぎない。われわれはここで新たに問題を立てようと思う。このような意味での指示の転移が可能であるためには、言語はそもそもいかなる本性を有するのだろうか。

従来多くの哲学者たちは、名辞の意味をこう捉えていた。名辞の外延の持つ属性なり、あるいは名辞が代表する概念なりを、必要十分に取り揃え、それを連言の形に言いあらわせ、こうして得られた言語形式がその名辞の定義にほかならない、と。こうした見解を、属性、概念といった存在者が内包と呼ばれるところから、意味にかんする〈内包主義〉と名づけよう。この立場に拠って精緻な意味論の構築を企てているのがカッツである。かれは言っている。

> 語の意味というものはそれ以上分割できない存在ではなく、互いにある関係をもったいくつかの概念から成り立っている。それゆえ、辞書の仕事は、語の意味の概念構造を表示することにある(9)。

辞書の記載事項は各語に対してその意味の表示を与えるものであって、その標準的形式の詳細はさておいて、問題は語の意味が辞書記載事項のなかで完全に分析され、意味にかんするあらゆる情報がそこに表示されている、という点にある。カッツの言う〈概念〉とはいかなる身分のものなのかについても、議論が紛糾せざるをえないが(10)、それにもまして疑念を惹きおこす所以のものは、カッツの構想に語と語が指示するものとの関係にかんする明らさまな説明が欠けている点である。たとえば human という英単語には〔人間〕という意味成分が対応するのであるが、カッツはただ、human の意味は〔人間〕によって代表される概念であると言うばかりなのである。human の説明として、これは反証もできないかわりに、説明力も持ちあわせないのではなかろうか(11)。

カッツが語の指示関係について口を噤んでいるのは偶然ではない。内包主義は、実は、語の指示にかんして、語の内包によってその外延が規定される、という暗黙の前提を採用しているのである。語 human の指すものは、その語の有する概念が代表する〈人間性〉なる属性を持つ存在者にほかならない。

こうした内包主義は、隠喩の如実の生動を捉えようとしてきたわれわれの行く手に立ち塞がる大いなる障壁である。実際、内包主義によっては隠喩の真面目はまるでかたなしである。というのも、語の意味がある数の概念により規定されているなら、この掟に背いて、新たな概念の配置を捲きぞえにするようにみえる隠喩とは、つまるところ語の誤用にすぎないからである。もしも隠喩が言語使用の過ちなどではなくて、その本来の可能性であるなら、語の意味について、われわれは内包主義に代る見地を確立しなくてはならない。

この点で多大の示唆に富むのは、近年クリプキ、パットナムらによって唱えられたネオ本質主義であろう(12)。かれらはとりわけ自然種の名（例、「ライオン」、「水」、「金」など）を問題にした。こうした問題設定は、あのアリストテレスの比喩の定義に類種概念がはっ

きり登場することを想えば、まことに興味深い。隠喩は、われわれが事物を分類しながらそれら事物との交際に入るという、われわれと事物とのもっとも基本的なかかわりに一つの根ざしを有するのである。ネオ本質主義者は、一般名辞（とりわけ種の名）の意味を、次のように捉える。命名者はさしあたり使用可能な一定の記述を用いて外延を固定しつつ、その事物をある名で称ぶのである。一般名辞の意味の成分には、したがって、記述が描写する特性を名辞の担い手が持つという旨、ならびに名辞がこれこれの外延を指すという旨が含まれている。これは内包主義からすれば、とんでもない背理にすぎない。というのも、ある名がしかじかの外延を持つ事実は、名の意味によって規定される以上、意味の成分に外延がまぎれこむすべもないからだ。しかしネオ本質主義から見れば、内包主義が「意味」の意味を誤認しているからこそ、そこに背理を見てしまうのだ。意味は人びとの間でやりとりしうるものではない[13]。比喩を使うことが許されるなら、それはむしろ事実上の絆で世界と繋がれた投網のごときものである。例をあげて、この比喩をもっと精確なものにしてみよう。

たとえば目の前にレモンがあるとする。人はそれを指して「この黄色で芳香を放ち酸っぱい汁を含んだ果実を「レモン」と呼ぶ」と発言しつつ、レモンの命名をおこなう。黄色、ある種の芳香、酸っぱい味などはレモンに特有な属性であり、これらを記述しながら、命名される当のものが、他の事物と分離されそれ自身の凝集をはかりつつ、固定されるのである。ここに使用された記述は「レモン」という名辞の、内包主義で謂うところの「意味」の内容をみたすわけではない。人はこの記述を、「レモン」が指示するものを固定するために用いるのである[14]。われわれはここにレモンの定義を得たことになる。すなわち、

レモン＝この黄色で芳香を放ち酸っぱい汁を含んだ果実をサンプルとするすべてのもの。

この定義は認識論的に言ってアプリオリである。換言すれば、定義が真であることを確証するために、わざわざ山野にでかけてあれこれの果実を検分する必要はない。しかしこの定義は形而上学的に言って、何ら必然的ではない。たしかにレモンは黄色くて酸っぱいけれども、たとえレモンが黄色くなく酸っぱくもなくとも、やはりレモンは存在したであろう。たとえば、ある時から実をむすんだレモンがことごとく紫色を呈するようになったと仮定しよう。もし内包主義的な「レモン」の定義がその意味標識中に〈黄色〉を数えているなら、今目のあたりにしている紫色の果実はもはや「レモン」とは呼ぶことができない。しかし普通われわれは依然としてそれを「レモン」と称するだろう。「黄色いはずのレモンが、紫色になった」と、われわれは述べるのである。レモンを指定するのに用いられた属性は、われわれがそうするのにさしあたり使用しうる偶然的特性にすぎない。「レモン」という名辞は、レモンの特性がどのように変わろうとも、それにはかかわりなく、つねにこのレモンを指す。

どんな可能世界においても同一対象を指示するこの種の名辞を、クリプキは、〈固定指示語〉(rigid designator) と称した。従来、「これ」、「私」、「今」などの語はその発語の事実性に結びついた特異な語として「型代反射的」だとされてきたが、実は種の名にも同じ性格がみとめられるのである[15]。「レモン」とは、「あらゆる可能世界において、現実世界で「これ」と指されたものと、同一レモン性を保持する任意のもの」のことなのである。

ここで「同一レモン性」と称された関係を明らかにする記述形態を「理論」と呼ぼう。レモンが黄色くて酸っぱいと言うなら、それも素朴な理論である。人間は理性的動物である、と言うなら、これもまた理論である。ネオ本質主義を標榜する人たちによれば、固定指示語の機能を支える存在論的根拠として、どのような世界においても変化をきたさない、事物の本質があるという。人は黄色くて酸っぱいという、さしあたり使用しうるレモン理論を使ってレモンを指定したが、実はそのさい、レモンの本質が「レモン」の外延として指示されていたのだという。レモンの本質とは、レモンの染色体構造にほかならない。その染色体構造をXとよぼう。Xが変わらないかぎり、表皮が紫色になろうが、味が甘くなろうが、レモンはレモンである。ところで別の国で、外見がレモンにそっくりであり味もレモンと変わらないが、しかし染色体構造がYであるような果実が見出されたとしよう。その国の住人もこの果実を「レモン」と呼んでいる。果してそれは、われわれが言う意味で「レモン」なのであろうか。ネオ本質主義の見地からするなら、答は否である。われわれの国では「レモン」はXを意味するが、かの国では、それはYを意味する。つまり、語「レモン」が両義的であるにすぎないのである。

以上を整理してみよう。人はさしあたり使用しうる理論を使って外延を固定しつつ、事物を一般名辞で命名する。その後、(1)理論が変わることがある。レモンにかんして、いわば現象論的な、色や味の理論しか持ちあわせなかったのが、細胞の構造や遺伝子にかんする知見が得られるようになった。これは、名辞の意味の一部が変化した一例である。(2)外延がいわば実体論的に切り変わることがある。ただしネオ本質主義者は、同一の名辞についてこうした事態が惹起されることを認めない。レモンの染色体構造XがYになることはありえないのである。レモンはあくまでもXを持ちつづける。Yを持つ果実はレモンとは全然別の起源に発する別の果実にすぎないのだ。

ネオ本質主義の概略を紹介した今、あらためて、隠喩の可能性がそうした見地によってどのように確保されるかを調べてみよう。名辞の意味はさまざまなベクトルから織りなされている。しかしこれまで、それを単純化して(1)理論、(2)外延の二つの部面に分けて説明してきた。隠喩も大別すると、この二つの部面の変化を尺度として二種類に分けることができる。まず、理論が変わることによって成立する隠喩がある。たとえば決して氷点下にはならぬ世界W_1では、H_2Oはつねに液体である。この世界へ異星人が到来して氷H_2OをW_1の住人に呈示したとする。融けた氷がかれらのいう「水」に酷似することを住人たちは確認する。というのも、氷が融解した液体も

透明で色がなく渇きをいやすなどの点で、水といささかも変わりがないからである。かれらは異星人の持参した氷を指して、「これは水だ」とよぶだろう。かくして、「水」に伴う理論が修正されたのである。したがって「水」の意味はここに変化を蒙ったわけだ。かれらが「氷は水である」と語るとき、かれらが製作してみせたのは、ほかでもない一つの隠喩である。氷は文字通りには水ではない。氷で洗顔ができるだろうか。一般化して述べるなら、外延が不変で名辞に伴う理論が変わる場合、その名辞は隠喩として使われるのである。ただしこの種の隠喩はすみやかにその生きのよさを失い、死んだ隠喩に転化してしまいがちである。実を言うと、二回真の隠喩はすべてこのタイプに属している。前にあげた例をもう一度調べてみよう。

(9)　著者は茅屋に住んでいる。

茅揖きの家の住人がすべて貧しいとは決まっていない。それはH_2Oがすべて液体であるとはかぎらぬのと同様である。ところが、「茅屋に住む者」という記述で固定された著者について、(9)はその境涯の貧窮を隠喩的に語っている。これは「水」が氷を隠喩的に言うのと同様である。ただし語「水」の隠喩的使用と(9)の発言には次のような相違がある。氷をも「水」と呼ぶとき、「水」の内包は拡張されている。これに反し、著者を「茅屋に住む者」と呼ぶとき、この語句の内包は縮少されているのである。この点は、しかし、われわれの見地にとって本質的ではない。「水」の例はアリストテレスの言う「種から類」への指示の移行であり、(9)は「類から種」への移行の一例であるにすぎないのである。「水」の例が隠喩として実感できないむきには、「人はパンのみによって生きるにあらず」という聖書の一句を想いだしてほしい。食物の一種である「パン」は食物という類そのものを代表している。この種の比喩は後年狭い意味の隠喩と区別されて〈提喩〉とよばれることになったが、アリストテレスやグッドマンの定義では〈メタファー〉として一括されていることに注意を促したい。隠喩、提喩、換喩、誇張法などといった古来の文彩の区分がおのおの生成＝解釈の機制を共にすること、その意味でメタファーとして一まとめにしうることには、ここでは立入らない。いずれにしても、そうした細分化は二次的な意義しか持たないのである。

しかし多くの隠喩、そして生き生きとした隠喩は、たんに名辞に伴う理論の改変にとどまらず、その外延にまで斧鉞を加えずにはおかない。人ははじめ何がしかの狼理論を基礎にある動物を指して「狼」と呼んだ。狼の本質はその染色体構造Wであるとしよう。さて、別の機会に人間であるこのものを指して、かれは「狼」と呼んだのである。このものはWを持ってはいない。狼理論の全部が変わったわけではないだろう。狼の振舞いの描写は一部この人間にもあてはまるからである。変わったのはむしろ外延である。人情を「水」と呼ぶさいにも同じことが生じている。

ネオ本質主義者は、しかしながら、同一の語にかんしてこのよう

な野放図な外延の切り変えを許容しない。たとえば女王エリザベス二世が現実の両親とは別の二親、毛沢東夫妻から生まれたような可能世界を想像することは不可能だ、とかれらは言う。なるほど毛夫妻は女王によく似た娘をもったかもしれないし、おまけにその娘が中国の英国制覇の結果、英国女王となるような事態を仮想しうるかもしれない。だからといって、「エリザベス女王」とわれわれが呼ぶまさにその婦人が毛夫妻の子女であることは、絶えてありうることではない。女王にかかわる諸々の可能的状況を思念することはいくらでもできるけれども、女王その人が別の両親を持ったなどとは、想像できないのだ。異なる起源に発するものは、何であれエリザベスその人とは別人でしかない[16]。もう一例だけかれらの証言をここに引こう。いつの日か木と黒鉛からできていたはずの鉛筆が実は生体だったことが発見された、と想像してみよう。電子顕微鏡で覗いてみると、鉛筆の組織に神経が走っていたのである。そのときから鉛筆は産卵をはじめ、この卵から仔鉛筆がかえるのが観察された。もしこのような事態を想像しうるとするなら、鉛筆が生体である事実は「認識的に」ありうることだ。にもかかわらず、鉛筆が生体であるような可能世界は存在しない。ただ言えるのは、ある種の生体が鉛筆のような特徴を持つと知られる世界、要するに、この生体が鉛筆に身をやつしている可能世界があるということにすぎないのだ[17]。

アラン・ドロンは、たしかに、フランス人の両親のもとに生れなくともよかった。しかしこの現実世界でこのとおりかれはフランス人の二親から生れた。だとすれば、「アラン・ドロン」が日本人のサラリーマンを外延として指示するような、いかなる可能世界もない。適当な変更を加えれば同様にこう言える。「ゴリラ」が人間を外延として指示したり、「芸術作品」が愛をそうするような、いかなる可能世界も存在しないのだ、と。もちろん今問題なのは、「ゴリラ」その他の語にかかわる言語慣例が現実世界とは異なる可能世界、たとえば人間を「ゴリラ」という種の名で称し、反対にゴリラを「ヒト」という名で称するような可能世界があるかどうかではない。問題は語「ゴリラ」がゴリラが存在しうるどの世界においてもつねにこのゴリラを指すことを認めたうえで、それが人間であるような可能世界が存立しうるかどうかである。

こうした見解にわれわれは疑懼をおさえることができない。とはいえ誤解のないようあらかじめ次を表明しておこう。われわれの本意はネオ本質主義のすべてを、わけてもその根幹をなす「本質」観の全部を排斥しようとする点にはない。〈本質〉が何らかの意味であることをわれわれは是認する。ここに細説はできないが、伝統の形而上学や俗間に云う「本質」は社会論理的な機制によって産出されるのである[18]。それに加え、この種の本質とは別に、ネオ本質主義の唱える「本質」(たとえば水の本質 H_2O、レモンの本質すなわち染色体構造X)を認めることにもやぶさかではない(これまでかれらの見地を「ネオ」つきで呼んできたのは、前のタイプの本質主義と区別したいためである)。にもかかわらず、以上の論点とはおそらく独立な、異質な因子が、ネオ本質主義にはいとも無造作に混入し

ている節がみえる。不純物はそこから除かれねばならない。それというのも、隠喩が言語の本来の可能性たることを、曇りなく見通すためである。

不審な点は二つ数えられる。まず第一に、ネオ本質主義は事物の名について、その初発の、まさにはじめて事物が己れの名で呼ばわれる瞬間と、命名の事業が成就されたのち、その威信にすがって人が名を使用する機会とを混同しているのではないか。クリプキは認識の様態にかかわるアプリオリ／アポステリオリという観念と、形而上学的問題区分にかかわる必然的／偶然的という観念を厳格に分ける必要を強調した。ではこの点をなおざりにすることなく、事物の名がはじめて言語へ導入されるさいの模様を注視してみよう。ネオ本質主義者によれば、さしあたり利用しうる理論を外延固定に使いつつ、ものは命名される。たとえばこの黄色で酸っぱい果実を指して、人はそのかみ「レモン」と呼んだのだ。しかしレモンは黄色でなくともよかった。全部のレモンが紫色を呈するような可能世界が存在する。にもかかわらず、現にレモンはこのように黄色であり、この偶然的特性を捉えて、人はレモンを指したのである。ここは事物がはじめてその名をあかすという場面である。換言すれば、ここは事象の定義の場面なのだ[19]。「レモンが黄色であること」は、レモンを調べなければ知りえないことではない。というのも、その特性でレモンを固定することに、人は約定したのだから。こうして右の真理の身分は、アプリオリな偶然性にほかならない。

クリプキは、にもかかわらず、木製のテーブルにつきこう述べている。

もし本質主義の見解が正しければ、それはわれわれが一方でアポステリオリな真理とアプリオリな真理という観念、他方で偶然的真理と必然的真理という観念をきっぱり区別する場合にのみ正しいのだ。というのも、この〔木製の〕テーブルは、いやしくもそれが存在するかぎりにおいて、氷製ではなかったという言明は、必然的であり、がしかしこの言明は、確実に、われわれがアプリオリに知ることがらではないからである[20]。〈挿入句は引用者の補い。〉

つまりかれは「このテーブルが木製である」という真理の身分は、アポステリオリな必然性だと言うのだ。今、事物の起源とその本質の関連の問（この例で言えば、テーブルが木から作られた事実と、テーブルが木製であることがこのテーブルにとり本質であることとの関連性）は脇にのけることにする。というのもクリプキがレモンを例に語ってくれていないだけで、引用中の「テーブル」、「木製」、「氷製」をそれぞれ「レモン」、「黄色」、「紫色」に置き換えれば、われわれの言わんとするところに何の変わりもないからである。こう語るクリプキが身を置く場所が、命名という事業がすでに完了した後、先人の遺産で暮らす相続人よろしく「テーブル」という名辞を消費する場面であることは明白だ。相続人クリプキは、被相続人すなわち命名者とは異なり、テーブルが木製であるという約定はすで

に受けいれている一方で、それが約定どおり木材からできているかどうか実地に検分する権利を保留している。ネオ本質主義の命名理論を名の使用理論と混同してはならない。この透明で味の無い液体を「水」と呼ぶのがなぜ正当か、この問は名の使用にかかわる問である。化学分析の結果液体が H_2O だと判明するなら、その名の使用は正当化される。ところでパットナムも言っている、この種の正当化の手段は名の意味を構成しない、それはたんに語の正しい使用を保持するのに必要なだけだ、と[21]。ネオ本質主義者が「本質」を持ちだすやり口には二重の恣意が隠されているように思われてならない。名の使用の正当化に要請される「本質」をその都度の例にあわせて自らが指定するという恣意。なぜレモンの本質はその染色体構造Xでなければならないのか。むしろXを規定する分子構造Yではないのか。どちらも同じ資格で本質なのか、それともYがより本質的なのか、そもそも究極的本質が別にある（レモン性！）のか、など、ここではこれ以上追究しえない種々の問題が残っている。そして使用理論の探索途上で指定されたはずの本質を命名理論の名のもとにひけらかすという恣意。

かれらの「本質」の確言が、しかし、われわれの解するように命名理論から独立であるなら、それは果してどのような根拠を持つのだろう。その理由の全部でないにせよ、少くともその一部はかれらの言う「可能世界」概念に求められると思われる。実はわれわれの二つ目の疑義（というより異見）は、この概念に向けられているのだ。次にその次第を述べなくてはならない。

「可能世界」は六十年代から現在まで、ひきつづき、英米の哲学文献にもっとも頻繁に登場している用語の一つだと断言できる。その語の使用はさしずめ哲学的モードのさまを見せている。かつての我国の哲学的公衆における「実存」の使用のように。しかしそのような流行語の常としてその精確な語義は必ずしも判然としていないし、またその共通理解が確立されているとも言いがたいのが実情である。したがって、この場所で最小限必要な語義の整理をしておかねばならない。とは言え、そのために文献を博捜して言語社会学者のまねをする暇もなし、またその必要も全然ない。なぜなら、この語が元来形式的意味論構築の道具立ての一つとして、その昔ライプニッツの使ったことばから借用したものだという経緯に不明はないからだ。クリプキこそ五十年代末から様相論理の意味論を自らの手で作った当事者の一人であり、後のかれの哲学的言説で用いられる同じ語が、右の経緯に無関係だと誰が言えよう。かれや可能世界の意味論の哲学的応用をおこなっているとも目されるパットナムらネオ本質主義者の「本質」が、こうした由来を持つ可能世界概念にかかわりがありそうだという予想には立派な状況証拠がある、とわれわれは思う。

いささか前置きが長くなったが、われわれの結論を、その説明は後ほどするとして、あらかじめここに披露しておく。すなわち「可能世界」は少くとも二義的なのだ。一つは、ネオ本質主義者流の、様相論理の意味論に出自を持つ可能世界。これは現実世界があるいは辿ったでもあろう別の〈歴史〉（歴史に「もし」（イフ）は禁句だと言

うが、これこそ「もし」付きの歴史である）であり、またこれは「可能的経験」ないし現実世界の知識の範囲をついに越えることがない。もう一つは、可能的経験を超出した、いわば奇想の歴史としての可能世界[2]。これは現実世界の知識を大巾にはみだし、まさしく想像力により育まれるのである。ネオ本質主義者は可能世界[2]に思い到らない。それがかれらの言語観の貧しさの事由である。誤解なきようもう一度言えば、われわれはネオ本質主義の唱える本質を無碍に拒むものではない。われわれが指摘したいのは、ただこのことである。つまり人間は知識を生きることにおいて空しい地の上に本質という図を照らしだすことを余儀なくされているが、同時に、想像力をはばたかせて事物を夢みることもなしうるのだ。しかも実のところ、知は想像と、本質は夢想と、分ち難く結ばれているのである。そのような結ばれ、これこそ知識そのものであり、たんなる可能的経験などというものに知識をすりかえてはならない。隠喩の論がいささか隠喩過多に流れていると批判されるだろうか。しかしこれには、隠喩は言語の運命であり、ということは人間の運命ではないかと答えたい。それにしても、われわれの言わんとするところをできるかぎり隠喩抜きの散文で語ることに努めよう。

可能世界[1]の意義を見ぬくのによい証言は、古くはカルナップのものと、近年ではクリプキが「命名と必然性」と題しておこなった講義を新たに単行本としてだすさい付した序文中のコメントの二つである。すでに一九四七年の日付を持つ著書で、カルナップは可能世界[1]と本質的に同等な構想を示している。すなわち〈状態記述〉(state-description)の概念である。言語体系S_1（すなわち第一階の言語）のおのおのの原子文から、この文またはその否定のどちらか一方を選べば一つの文の集合が定まるが、これをS_1における〈状態記述〉とよぶ。もとより状態記述の数は無限である。一つの状態記述によって、S_1が含む述語によってあらわされる特性ないし関係を持つ個体から成る宇宙の、一つの可能な状態に対し、完璧な描写が与えられる(22)。クリプキは「可能世界」の語が（これ自体隠喩にほかならない）しばしばあらぬ誤解を招くとして、「可能的状態（ないし歴史）」もしくは「反事実的状況」の用語の方が好ましいとたびたび述べているが(23)、用語の類似にも示唆されているように、クリプキの言う可能世界[1]はカルナップの状態記述と異なるものではない。かれが、個体のいわゆる通世界的同定の問題――つまり、各可能世界を通じて同一の個体をいかにして指定しうるか、という問題――を偽問題として一再ならず斥けている(24)理由は、そもそも可能世界を現実世界（これも、カルナップ流に言えばS_1の一つの状態記述に対応する）を外にした遠い場所にあって、望遠鏡で覗き見しうるような、何かしら実体として考えてしまうのが錯覚だ、という点であった。そうではなく、可能世界とはS_1の内部状態のことなのだ。ごく単純な可能世界のモデルをクリプキは示してくれている。それは二つの骰子を投げてでた目の和にいく通りのものがあるか、という例だ。たとえば和が十一になる可能的状態はただ二つ（一方の目が五で他方が六、あるいはその逆）である。そして可能的状態の総数は、この場合、三十六通り存在する。もちろん自然言語の場合は、

こんな単純なモデルとは異なり、「ずっと多数のもっと複雑な状態」[28]が伴っているが、しかし基本においては二つのモデルに何の変わりもない。クリプキはこう明言している。

こうして、明らかになったのは、かれの言う可能世界が現実世界と(a)同数の個体から成り、しかしその性状や振舞いが変容しているか、(b)個体の数が増減しているか、このいずれかであって、そのいずれであるにせよ、原理的にネタのあがったS_1の内部状態として構想されているという事実である。クリプキは自身で自然言語にかんする理論的探究を体系立って企ててはいないし、また自然言語観を明確にしてもいない（少くとも主題的に）。だから今しがたのわれわれの判定がたんなるこちら側の思い込みにすぎぬ恐れは、公平に見て、ゼロではない。そこで仮に、と言い添えよう。仮にS_1（自然言語）の全ての文を生成しうる装置が定式化されうるとクリプキが考えているなら、たとえS_1の原子文が無限箇であれ、ある意味で原理的に、S_1における内部状態のネタはあがっているわけだ。あたかも骰子の目数の和という事象のネタが、この場合は原理的にも事実上も、あがっているように。このような規定性に置かれた可能世界集合Σの認識論的関数を、われわれは〈可能的経験〉あるいは短く〈知識〉と呼ぶ。この可能的経験の中に生体である鉛筆や日本人であるアラン・ドロンの存在は含まれていないはずだ。というのも、そもそもΣが許容しうる事象の資格を、そうした怪物たちが欠くからである。しかしもう一歩踏みこんで、なぜか、と問うことができる。恐らく、Σの構成には次の暗黙の原理が関与しているのではないだろうか。すなわち、Σが許容しうるあらゆる事象（Σの成員）は、現実世界にすでに存在するか、もしくはこの世界に妥当する法則性の名のもとに存在可能性を授った個体、特性、関係から成るという原理である[26]。この原理を〈異象排除原理〉とよぼう。残された問題は少くない。たしかに異象排除原理が働けば、いかなる可能世界においても怪物は出現できない。いつまで待っても鉛筆はついに産卵しないだろうし、アラン・ドロンはつねに青い眼の赤ん坊を生むだろう。しかし原理中の「法則性」の内容が曖昧である。それは現実世界で現に妥当している物理法則のことなのか、心理学の法則はては倫理規範まで含めて考えるべきなのか、しかし、物理法則が異なる可能世界、たとえば水の沸点が一気圧下で二〇〇度であるような可能世界を構想するのは十分可能ではないのか、それともやはりネオ本質主義者の言うように、そのような仮想は水の本質に反しており、可能的状況としては許容されないのか、等々[27]。われわれは心残りながら問題を放置したまま、可能世界の二番目の意義へと目を転じなくてはならない。

可能世界^{2}は異象排除原理の制約をこうむらずに創られるような反事実的状況のことである。可能世界^{1}が知識の関数であるとするなら、可能世界^{2}は想像力の関数にほかならない[28]。ここにはあらゆる怪物が跳梁しうるのである。この世界では、人間が即ゴリラとして咆哮し子女をあやめ、会社の同僚がフランス人俳優の顔で女性職員と談笑する。後者の例はフロイトが夢で出会ったドクター・Mなる人物の件を想起させる。この人物はなるほど「ドクター・M」

という名前を持ち、ドクター・Mのごとく話したり振舞ったりするが、この人物のからだの特徴や病的症状は実は別の人物、つまりフロイトの長兄のそれそのものだった、と言う。精神分析学者は、蒼白い顔色という点でMも長兄も現実に共通していた、という指摘を逸してはいない[24]。かれは夢の像のこの種の形成を〈圧縮〉と呼んでそれを合成写真になぞらえたが、われわれに言わせるなら、この事例は固有名を用いた隠喩の機制と同型である。合成写真のたとえは無雑にすぎてとるに足りない。

三　結論

隠喩には焦点化される要素と枠をなす要素の論理的タイプ――一般名辞か個別名辞か、限量の有無などの要因がそれをきめる――により、各種の型があるが、それぞれに指示の転移という現象がみとめられる。指示の転移は〈語の意味〉という概念にかんし再考を強いるだろう。というのも、語の意味が概念からできているという式の内包主義からすれば、指示の転移などはたんなる「現象」にすぎないからだ。オースティンがこれと同じ問題を我が身にひきうけたとき、その論文「語の意味」のⅢ節でおこなったのは、実質的には内包主義の批判であり、かれが反例としてあげた中にまぎれもない隠喩が多く採られていたのは、決して偶然ではない、とわれわれは思う[30]。しかしかれは性急にも、問題の概念がノンセンスだときめつけた。つまり、しかじかの語の意味は何かと問うことは有意味であっても、総じて語の意味とは何かと訊ねるのはただちに無意味に陥る、と言うのである。問題はオースティンがこの論文で、これこれの語の意味（the meaning of a word）を正当に認めているかどうかにある。もちろん普通の意味ではかれはそれを認めるし、だから今述べたように、個別の語にかんしてその意味を問い立てすることは可能なことだと明言しているのである。しかし語の意味の事例を是認しながら、語の意味という一般者を認めずにすますことが、いかなる精妙な理論によればかなえられるのか。唯名論者は普遍を切り捨てる代償に普遍の事例も割愛する。かれは個別者とむきあうだけだ。オースティンはどうやら語の意味の存在を是認してはいないらしい。かれは言う、「厳密に言って意味を持つのはひとり文のみであると、そう主張して間違いはなかろう」と[31]。

これは奇妙である。語も文とは別に意味を持つという直観を、反対に、説明する仕事が増えてしまうばかりでない。文が意味を持つことをオースティンは認めている。では文中のある語を別の語に変えてみよ。その結果文の意味が変わったとしたら、この変化の要因は明らかに語の置換にある。そして語の置換が文の意味上の変化に有意性を持つなら、語そのものにこの変化の潜在能力を認めざるをえない。この潜在能力を語の意味とわれわれは称すのである。

したがってわれわれが面している問題状況はこうである。〈語の意味〉を無碍に排しもせず、しかし従来の内包主義にもくみしえないとすれば、隠喩が可能であるためには、語の意味とはどのようなものでなければならないか。状況の行手に明るい光を投じる見地を、

われわれはネオ本質主義に見出した。名辞はさしあたり使用しうる理論を用いて対象を固定しつつ命名されるのである。〈語の意味〉はこうした命名理論と両立しうる方向でその概念内容が規定されねばならない。こうして得られた概念は、まだ荒削りだとはいえ、すでにある種の隠喩における指示の転移をよく説明する。それはたんなる「現象」ではなく、自ずから目のあたりに立ち現われる現実そのものなのだ。ところがこれではまだ説明できぬ指示の転移が各種残っている。この隘路を抜けるには、ネオ本質主義の可能世界論を拡張しなくてはならない。われわれはそれを知識と想像力の結合という形で実現することを企てた。この企てには細部において、未知の問題をも含め多くの課題が立ちふさがっている。しかし大要において、われわれの探求が誤った道を辿っているのではないことは、すでに明らかだろう。というのも、更新されつつある新たな〈知識〉の概念こそ、ネオ本質主義では救助しえなかった隠喩を、たんなる言語の誤用としてではなく、われわれの自己の住家たる言語の本来の可能性として処遇できるからなのである。

註

(1) アリストテレス、『詩学』、一四五七b七、アリストテレス全集十七巻所収、一九七七、岩波書店。

(2) Goodman, N., *Languages of Art*, 1968, p. 71.

(3) cf. Mill, J. S., *A System of Logic*; Kripke, S., 'Naming and Necessity' in Harman and Davidson (eds.), *Semantics of Natural Language*, 1972.

(4) (1)指示を等しくする確定記述を持つとするもの（フレーゲ、ラッセル）、(2)指示を等しくする記述群の不確定な部分集合を持つとするもの（ウィトゲンシュタイン、サール）、(3)固有名は述語である（バージ）。

(5) 菅野盾樹、「文彩――隠喩の存在とその固定――」、『大阪大学人間科学部紀要』第九巻、一九八三、三一四ページ。

(6) この例については前註にあげた論文、三〇五ページを見ていただきたい。

(7) 紋切型の概念については次を参照。菅野盾樹、『我、ものに遭う』、新曜社、一九八三、二七九―二八一ページ。Putnam, H., 'Is Semantics Possible?' in Munitz et al. (eds.), *Language, Belief, and Metaphysics*, 1970, p. 59; 'The Meaning of "Meaning"' in Gunderson, K. (ed.), *Language, Mind, and Knowledge*, 1975, p. 147, p. 166-171 etc.

(8) 分析しのこした二回真の隠喩の例として共感覚にかかわる隠喩がある。たとえば「この絵は明るい」ここには絵の色調を「明るい」という感覚で捉え、この感覚の「明るさ」を描かれたものへ移行するという、転移の二重性がある。

(9) カッツ、『言語と哲学』、大修館、一九七一、一二七ページ。

(10) カッツはこの〈概念〉についてあらましこう述べている。それはイメージや観念などの、個人が心意のうちに所有する心理的存在者ではなく、客観的に存在する「抽象物」(abstract entities)である云々。Katz, J. J., *Semantic Theory*, 1972, p. 38 を参照。

(11) こうした批判が次に示されている。Kempson, R. M., *Semantic Theory*, 1977, p. 19-20.

(12) 一般にはかれらの立場を「本質主義」(Essentialism)と呼び慣わしているが、われわれは古代にアリストテレスが述べた本質主義がかれらに直結しているとは考えない。そこでクリプキらの考えを言う場合には特に「ネオ」の修辞をそえることにする。註（18）を見よ。

(13) 「もし意味を与えること〔つまり意味を伝えること〕が意味なるものを与える行為であるとするなら、それはあるはっきりした事物を与えるこ

とではないのである。」(Putnam, H., 'Is Semantics Possible ?' in Munitz et al. (eds.), *Language, Belief, and Metaphysics*, 1970, p. 61.)

(14) Kripke, S., 'Naming and Necessity' in Harman and Davidson (eds.), *Semantics of Natural Language*, 1972, p. 273-274.

(15) Putnam, H., 'The Meaning of "Meaning"' in Gunderson, K. (ed.), *Language, Mind, and Knowledge*, 1975, p. 152.

(16) Kripke, S., op. cit., p. 313f.

(17) Putnam, H., 'The Meaning of "Meaning"', p. 161.

(18) 菅野盾樹、『我、ものに遭う』、新曜社、一九八三、第Ⅱ部参照。著者は俗間に言う「本質」とネオ本質主義者の言う「本質」とを、両者の重なりや類似を是認する一方で、概念としてあくまで別のものだと考えている。

(19) 菅野盾樹、同書、二八八—三〇二ページ参照。

(20) Kripke, S., 'Identity and Necessity' in Munitz, M. K. (ed.), *Identity and Individuation*, 1971, p. 152-153.

(21) Putnam, H., 'Is Semantics Possible ?', p. 62.

(22) Carnap, R., *Meaning and Necessity*, 1947, p. 9.

(23) Kripke, S., 'Naming and Necessity', p. 345, n. 15 ; *Naming and Necessity*, 1980, p. 15. 実際クリプキは論文 'Identity and Necessity' を含め「反事実的状況」(counterfactual situation) の語を好んで使っているように見うけられる。

(24) Kripke, S., 'Identity and Necessity', p. 146 ; 'Naming and Necessity', p. 267, p. 270, p. 272. ; *Naming and Necessity*, p. 15.

(25) Kripke, S., *Naming and Necessity*, p. 19.

(26) この原理はレヴィンが示唆した。Levin, S. R., *The Semantics of Metaphor*, 1977, p. 147, n. 10. 参照。しかしここに掲げた形の原理はあくまでもわれわれの考案である。

(27) 異象排除原理に対する人びとの態度が問題である。怪物は一方で忌み嫌われ、他方で好み喜ばれる。前者が種の現象を支え、後者が隠喩のそれを支える。この原理に対し人びとは場合に応じ建前と本音を使い分けているように見える。

(28) Levin, S. R., op. cit., p. 147, n. 10.

(29) フロイト、『夢判断』下巻、新潮文庫、一九六九、三七八ページ。

(30) Austin, J. L., 'The Meaning of a Word' in Austin, J. L., *Philosophical Papers*, 1970.

(31) ibid., p. 56.